



水沢 勉
MIZUSAWA Tsutomu
(美術史家・美術評論家)

三回目の審査にも参加し、全体の印象についてようやくコメントできるようになったように感じています。それは、一言でいえば、水準の高さです。それは、表現の個性とは別に、表現の質といえよいのでしょうか、出来不出来というような凸凹ではなく、表現意識の鋭さと冴えをそれぞれの候補者たちが備えている。それもあって候補者をすぐに絞ることができませんでした。そのかわりに投じた時間のおかげでそれぞれの審査員の意見を確認することができ、賞の対象の質と量の妥当性を確保できたのではないかと感じています。

今回、市長賞の受賞者に選ばれた牛島智子は、八女市の生まれであり、同市を拠点に、土地の記憶を宿した素材を駆使して、身近なモチーフから、普遍性を追求するインスタレーションと絵画を発表しつづけています。まさしく福岡での受賞に相応しい作家。近年の色彩の輝きの魅了の飛躍は今回の高評価のポイントでした。

2022年度より新設された福岡アートアワードも三回目をむかえた。初回から選考委員として関わらせていただいているが、回を重ねれば重ねるほど本賞のユニークさを実感している。

過去の講評でも触れているが、FAAのユニークさは福岡市美術館によるアワードとして、最終的には作品が買い上げされること、つまり贈賞形式にある。かねてより日本の国立美術館においては収集予算が少ない（ゼロの美術館も多い）ことが問題になっているが、アワードという制度を活用することで、美術館が優れた作品を収集する機会を持つということは、好例と言うべきだろう。FAAの審査は二回の選考を通じて受賞が決まる。その経過はあまり知られていないが、一次審査を経て作家、作品が絞られた後に、美術館の学芸員たちは最終審査へと進む候補作家との協議を行い、収蔵後の保存・再展示という美術館活動にとっては重要なポイントを考慮した作品が最終的な審査の俎上へ上がる。

本アワードの応募条件には、過去一年間に福岡での活動経験を要するが、過去五年以内に制作された作品であれば表現技法も問わないこともあり、これは審査する上で難しさもたらす。評価基準をどこに、何に求めるのか。各選考委員の審査ポイントも異なるだろうが、大きな議論とならず受賞作品が決定されている経過からは、作家性や表現される作品コンセプトについて一定のラインを共有しているようにも感じる。

三回目を迎える福岡アートアワード。前二回と比べ、今回の選考では特に長年、粘り強く、かつ、しなやかな活動を継続してきたアーティストたちの作品が光っていた。40年以上のキャリアを持つ牛島智子には、日常や土地固有の文脈と切り離されてしまったモダニズム絵画のある到達点への懐疑的姿勢があるように思う。土地独特の素材や、生活のなかで日々繰り返される多様な労働を彷彿とさせるモチーフには、作者の生活と制作とのゆるぎないつながりを感じた。オーギカナエの作品は、一見シンプルにみえて、かたちや色彩、スケールの変容が、空間で作品と見るものとのあいだに生み出す繊細な関係性に、注意深く、丹念に向き合う。SECOND PLANETは、膨大な資料のリサーチや編集作業を通して、歴史や近代をめぐる問題を今日へと接続する。作品に導かれ焦点を少しずらすことで、歴史、国家、近代など大きな物語に対する新たな想像



植松 由佳
UEMATSU Yuka
(国立国際美術館 学芸課長)



堀川 理沙
HORIKAWA Risa
(ナショナル・ギャラリー・シンガポール ディレクター キュレトリアル&コレクションズ)

優秀賞のオーギカナエもみずからの暮らしに関わる洪水や山崩れの記憶や体験を、展示可変の立体表現に変換させ、ひかりに溢れた色彩豊かなインスタレーションを試みています。「美しさ」に潜むなものかとの対話を誘います。

SECOND PLANETは、グループとして、マルチメディアを駆使し、多様な創作活動を、北九州を拠点として展開。今回の優秀賞作品《カタストロフが訪れなかった場所》は、長崎の原爆投下をめぐる作品でありながら、歴史的検証を表現のきっかけとしているだけでなく、カタストロフ一般についての思念や感性を刺激するはずで

興侶優護は、福岡市を拠点に制作していますが、人物を基本モチーフとしながらも、じつに変化に富んだ色彩表現と画面構成を組み合わせることによって、絵画表現の未知なる領域を探索しているように感じられました。以上、今回の受賞作品は、全体として、洗練さと創作意識の高さを感じさせずにおかないものだったのです。

三回目となる今回は、経験豊かな作家が受賞したように思う。市長賞を受賞したのは福岡での活発な活動で知られる牛島智子。受賞作品からは、自身の作家活動とともに子育てや家事と女性としての個人史もうかがえるが、それとともに広く女性たちへのエール、また社会に対する強い批判性を感じさせる良作である。優秀賞受賞のオーギカナエも福岡県内を拠点に長く活動し「スマイル茶会」といった作品を通じてよく知られている。水害によりスタジオが浸水被害を受けたオーギが、災害被害を受けながらも自らを取り巻く自然が有する力に視線を向け展開した新しいインスタレーション作品は強い印象を受けた。北九州在住の外田久雄と宮川敬一によるアーティストユニットSECOND PLANETも幅広い活動で知られる。《カタストロフが訪れなかった場所》は、1945年8月9日に原子爆弾を投下される第一目標だった小倉だったが、結果的には破壊を免れたという事実から制作された作品。今なお世界各地で続く戦闘の地で、「カタストロフが訪れなかった場所」がさまざまな理由から日々生まれているのだろうかと考えさせられた。興侶優護の絵画作品は、人体をモチーフに据えながらも、リサーチを通じて体験・取得した光景や事物を重層的に構成。揺らぐイメージや色彩の拡張が印象的であった。

今回の受賞者たちからは、揺るぎない表現力、声高なメッセージ性を感じた。これは過去の受賞者たちにも共通しているのかもしれない。そうした表現者たちが今後も福岡の場で発表を続けることを期待している。

がむくむくと引き出される。普遍性と現代性を備えたイメージを追求する興侶優護からは、個人的には、作品にみられる女性像がやや固定的でないか気になる部分もあったが、審査協議でそれを超える視覚的な実験性が認められると意見がまとまった。

最後に、SECOND PLANETが、北九州を地盤にアジア各地の作家やコレクティブとの協働を、美術館などメインストリームのチャンネルを通さずして自ら切り開いてきたことを特筆しておきたい。資本の集中する「中央」を介さずして、北九州から直にアジア各地の作家たちと横に連携し、展示活動やプロジェクトを展開してきた姿勢は、より多くの人に広く知られるべきだ。オーギカナエも久留米からアジア作家との交流を長年育んできた。アジアとの深い結びつきのある福岡のアートアワードにふさわしい活動といえよう。



第3回 福岡アートアワード受賞作品展

The 3rd Fukuoka Art Award Exhibition

2025.3.29(土) - 6.1(日)

会場：近現代美術室B

実施概要

福岡アートアワードは、福岡市美術館が Fukuoka Art Next の一環として実施する事業であり、2022年度に創設されました。過去1年間に福岡市内で目覚ましい活動をおこない、今後さらなる飛躍が期待できるアーティスト（美術作家）を対象に、贈賞によりアーティストを支援し、買い上げ作品は福岡市美術館の所蔵品として展示活用されるという、新たな視野をもつアワードです。本アワードの開催により、福岡市にアーティストが集まり、質の高い作品の展示と市民がアートに親しむ機会が増え、福岡市がアートのまちとなることを目指しています。

第3回福岡アートアワードでは、応募資格を過去1年間に福岡市内で公開・発表をともなう活動をおこなった作家とし、2024年8月1日から9月30日の募集期間に、62組の応募がありました。同年11月10日に開催した第1次選考委員会では、応募資料をもとに、元神奈川県立近代美術館館長 水沢勉氏、国立国際美術館学芸課長 植松由佳氏、ナショナル・ギャラリー・シンガポール キュレトリアル&コレクションズ ディレクター 堀川理沙氏というグローバルに活躍するキュレーターで構成された選考委員による厳正なる審査により、11組が第2次選考委員会に進みました。同年12月17日に開催された第2次選考委員会では、作家から提供された追加資料とともに買い上げ可能作品についての審査がおこなわれ、最終的に4組の受賞が決まりました。

本アワードは、作品を購入し、福岡市美術館の所蔵品とするというこれまでにない形を取ります。4組の作品は、収集にふさわしい作品かを審議する収集審査会に諮られ、収蔵が承認されました。本展覧会では、福岡アートアワードの受賞作家4組の買い上げ作品を初披露いたします。



福岡市美術館
FUKUOKA ART MUSEUM

〒810-0051 福岡市中央区大濠公園1-6
TEL 092-714-6051

市長賞 Mayor's Award



牛島 智子 USHIJIMA Tomoko

《家婦》
House Woman
2020

1958 福岡県八女市生まれ
1981 九州産業大学芸術学部美術学科卒業
福岡県八女市在住



受賞コメント

私の仕事場は、いろんなものがまだまだ整理がつかないまま、ごちゃごちゃとにぎやかだ。例えるなら小劇団の稽古場のようで、作品は役者で、セリフを読んだり、衣装の縫物かと思えば、大工仕事をしている。今回、家婦は大きな舞台に抜擢されたんだと誉れ高く思った。見た目はちっぽけだけどそれは大切なことだと思う。長い時間を素材に内包している。いろんな作品と美術館と共振して、長く愛される作品になるように願っている。

作品コメント

建築としての家／家庭としての家／家系としての家、この3つのベクトルの力が私を作った。20歳で家を出た。40歳でアーティスト・イン・レジデンスで動くことを想い生家を基盤にしたが、家住期の私は家を整え、子供を育てた。林住期に入った私は「40年ドロージングと家婦」展で、身体を守る最小の家で自制御できる最大の家というもので旅に出ようと思った。すると包まれるように幕絵の過去があり、内省していくように家の中に未来が開かれている気がした。

優秀賞 Merit Award



オーギカナエ OHGI Kanae

《空に登って集まって、めじろ眼鏡の森、
白い花～植物は考え歩き行動する～》
Climbing and gathering in the sky - White-eye forest
- White flowers : Plants think, walk, and act
2024

1963 佐賀県唐津市生まれ
1984 武蔵野美術大学短期大学部卒業
福岡県久留米市在住



受賞コメント

自分自身が経験した豪雨や山津波の災害をいろいろな意味で消化できずにいた時に造形的な興味に従って手を動かしてゆくと自然と翻訳されたように小さなこの作品たちが生まれました。
心の中の重いものを下ろす、これからもそんな作品をつかってゆき共有できる機会が増えることを願います。

作品コメント

小さな植物の種が重く水を含んだ土砂の中に仕込まれていて細やかな光で芽を出し周辺の環境を変えてゆきます。
去年まで来ていた鳥は来なかったけれど今年は別の鳥がやってきました。
世界は瞬間で変化していて、そこに無意味や偶然はないようです。
自然の一部である私はそのことをカタチにして世界の見方を変えて希望につなげてゆきます。

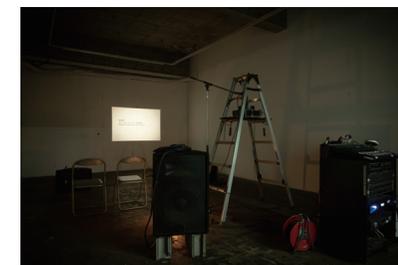
優秀賞 Merit Award



SECOND PLANET

《カタストロフが訪れなかった場所》
A Place Without a Catastrophe
2024

1994 北九州市でアーティストの
外田久雄、宮川敬一により結成。
2019 アーティスト兼キュレーターの岩本史緒が加入
福岡県北九州市を拠点に活動



受賞コメント

この度は受賞の機会をいただきありがとうございます。1994年に活動をスタートして以降、様々な方々と幾多のプロジェクトを行ってきました。1997年に小倉でオープンしたギャラリー・ソープもまた、多くの出会いと思考の活動の場となってきました。これまで支えていただいた方々、この作品に関しては特に、ibi Ryota（音源制作）、鶴留一彦（スライド制作）、OVERGROUND（会場提供）に感謝申し上げます。

作品コメント

受賞作品は、1945年8月9日の小倉をテーマに、歴史的な出来事が「起きなかった」ことを扱ったものです。原子爆弾を積んでテニアン島から小倉に向かったB29のタイムラインを示すスライドと、展示会場の環境音やオンライン、オフラインで収集された音源を用いたサウンド・インスタレーションは、ある出来事が起きなかった場所で、出来事の実態や「中心となる物語」を欠いたままその出来事を扱うということを試みた作品です。

優秀賞 Merit Award



興梶 優護 KOHROGI Yugo

《/72》
2018（加筆2020）

1982 熊本県生まれ
2009 東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻版画研究領域修士課程修了
福岡県福岡市在住



受賞コメント

私にとっての制作は、光、色彩、視覚といった曖昧で移ろいゆくものに対する興味が出発点となっています。それらを絵画性の拡がりのなかで、集積していくような行為が作品としての表れです。この受賞を励みに今後も制作と社会に向かい合い、時代や国を越えて共有できるような作品を生み出していきたいと思っています。関係者の皆様、家族や友人、そして作品をご覧くださった皆様に心より感謝申し上げます。

作品コメント

普段何気なく気になるのは、不確かなものや、移り変わっていくような曖昧な存在についてです。光の波長の一端として色彩を捉えてみるときに表れる光学的な側面、反射や屈折・フレアといった重なりをヒントに、根源的な普遍性と現代性を備えた像の表出を目指しました。イメージの元として、日常の風景や古典絵画・ステンドグラス・ゲーム・仮想現実空間などを参照しています。